

JUGEND PHILHARMONIKER

ユージュント・フィルハーモニカー

第 15 回定期演奏会

2021.3.21 ミューザ川崎シンフォニーホール

ごあいさつ

本日は、ユーгент・フィルハーモニカー第15回定期演奏会にご来場くださいます。誠にありがとうございます。

コロナウイルスの感染拡大から約1年が経とうとしています。昨年、漠然と想像していた1年後の日常は“After Corona”だったと回顧しますが、依然として難しい状況が世間を取り巻いています。この“With Corona”の中で、あらゆる事象の本質が問われているようにも感じます。

当団にとって創立15年目となる本シーズンも、困難と挑戦の連続でした。無観客開催を余儀なくされた昨年の定期以来、活動再開の目処が立たない期間も経験しました。お客様、そして団員にとっての安全を第一に考える中で、演奏会の開催地変更など苦しい決断も多くありました。一方で、多くの仲間が「この時代が過ぎたら」ではなく、「この時代にいかに音楽をするのか」という発想で取り組んでくれたからこそ、本日皆様をお迎えすることができました。ここ一番でのユーгент・フィルの強さに勇気づけられていたのは、他ならぬ私自身だったようにも感じています。

さて本日は、今回で7度目と過去最多の共演となります三河正典先生の指揮により、当団にとっては大切なレパートリーであるオール・ドイツ・プログラムをお届けいたします。ピアノ協奏曲のソリストには、3度目の共演となります結城奈央さんをお迎えしています。またメイン・プログラムには、オーケストラの真の力量が問われる大作、R.シュトラウスの交響詩『英雄の生涯』を取り上げます。

実に2年ぶりとなる定期演奏会、また15年の節目の公演のために、団員一人ひとりが感染防止対策を徹底の上、鋭意練習を重ねてきました。どうかお楽しみいただければ幸いです。

最後になりましたが、共演者の皆様をはじめ、本演奏会の開催にあたってご協力いただきました数多くの皆様、そしてこういった状況下にも関わらずご来場いただきました数多くの皆様に、心からの御礼を申し上げます。今後とも当団の活動に対してご期待とご高配を賜りますよう、何卒よろしく願いいたします。

ユージェント・フィルハーモニカー 代表 湯田 怜央奈

プログラム

F. シューベルト：劇音楽《ロザムンデ》序曲

L. v. ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番《皇帝》

— 休憩 20分 —

R. シュトラウス：交響詩《英雄の生涯》

(終演 16:00 頃)

指揮 = 三河 正典 ピアノ独奏 = 結城 奈央

演奏中にスマートフォン等でパンフレットをご覧いただけますが、音が出ないように設定の上、画面を暗くするなど周りの方への配慮をお願いいたします。

指揮 三河 正典

東京藝術大学作曲科および指揮科に学んだのち、パリ・エコール・ノルマル音楽院に留学、満場一致の首席で卒業。作曲を北村昭、佐藤眞、近藤譲、池野成の各氏に、指揮を小林研一郎、松尾葉子、秋山和慶、河地良智、



ドミニク・ルイツの各氏に師事。さらに、ムステイスラフ・ロストロポーヴィチの元で研鑽を積む。第4回ブルー・ダニューブ国際オペラ指揮コンクール第4位、審査員特別賞受賞。ブルガス歌劇場にてヴェルディ作曲「椿姫」を指揮。

これまでに日本フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、京都市交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、群馬交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、サンクトペテルブルグ交響楽団、ロシア・トムスクフィルハーモニー交響楽団、サンクトペテルブルグ・カルペ・ディエム室内管弦楽団、パザルジク交響楽団、浙江交響楽団、ヴォーチェ・ソナーレなど、国内外のオーケストラ、合唱団を指揮するほか、新国立劇場、二期会をはじめとするオペラ公演や、サイトウキネンフェスティバル、アルゲリッチ音楽祭などで合唱指揮者、アシスタントコンダクターとしても活動している。

現在、東京藝術大学および東京音楽大学、同大学院指揮科、声楽科（オペラ）講師を務め、後進の指導にもあたっている。ユーгент・フィルとは今回で7度目の共演となる。

ピアノ 結城 奈央

福島県出身。東京藝術大学音楽学部器楽科卒業後、渡独。国立ベルリン音楽大学ハンス・アイスラーを最高点で卒業。ディプロマ取得。ヨーロッパヤマハ事業団による「ドイツ国内音楽大学生のための奨学金コンクール」にて奨学生に選ばれる。第18回カルレット国際ピアノコンクール優勝。第17回ブラームス国際コンクールピアノ部門優勝。現代音楽では、イスラエル人作曲家ロン・イエディディア氏のピアノソナタ第3番"Outcries"を日本初演した。



これまで日本・ドイツ・スペイン・ニュージーランドにおいてソロリサイタル、ピアノコンチェルト、室内楽コンサートを開催。ピアノを手塚真人、田邊融、故三浦洋一、岡野寿子、佐藤俊の各氏に、室内楽を岡山潔、コンラート・リヒターの両氏に、歌曲伴奏法をコンラート・リヒター氏に師事。ベルリン音楽大学にて、ピアノ・室内楽をMichael Endres、Gabriele Kupfernagel、Stefan Picardの各氏に、歌曲伴奏法をWolfram Rieger氏に師事。Aviram Reichert、Kevin Kenner、Georg Sava、Henri Sigfriddsonの各氏のマスタークラスを受講。

現在、演奏活動の他、各地でのレクチャーコンサートや後進の指導にも力を入れている。

ユージェント・フィルには、2018年福島公演および2020年特別演奏会（「第4回福島公演」代替公演）に出演。今回で3度目の共演となる。

ユージェント・フィルハーモニー

一般財団法人日本青年館と全日本高等学校オーケストラ連盟の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユングオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設された。全国各地の高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≡プロオケには出来ないこと）」を追求している。



今期の活動紹介

2020.

- 10.25 特別演奏会―「第4回福島公演」代替公演―
(ルネこだいら小平市民文化会館大ホール)
- L. v. ベートーヴェン：劇音楽《エグモント》序曲Op.84
- W. A. モーツァルト：ピアノ協奏曲第21番K.467
- F. メンデルスゾーン：交響曲第4番イ長調《イタリア》Op.90
- 指揮：安齋拓志 ピアノ独奏＝結城奈央
- 12.5 室内楽演奏会（団内）（森下文化センター第1レクホール）
- 12.19 依頼演奏：ヒルデモアたまプラーザ・ビレッジⅢ
- クリスマスディナーパーティ
- 12.31 依頼演奏：山中湖畔荘ホテル清溪 ミニコンサート

曲紹介

昨年、生誕 250 年を迎えたベートーヴェン。世界中で予定されていた記念イベントの多くがコロナ禍のため中止を余儀なくされたが、生誕地ボンや彼が活躍した街ウィーンでは、記念イベントが今年も続いている。15 回目の節目を祝う今年のユーゲントは、そんなベートーヴェンの協奏曲と、彼に畏敬の念を抱いた二人の作曲家の作品による、互いにリンクし合うプログラムをお届けする。

F. シューベルト (1797~1828) : 劇音楽《ロザムンデ》序曲 D 644

ドイツの女性作家ヘルミーナ・フォン・シェジーの劇《ロザムンデ》は、1823 年 12 月、シューベルトの劇音楽とともにアン・デア・ウィーン劇場で初演された。この劇場は今でもウィーン第 3 のオペラ劇場だが、かつてここにはベートーヴェンが住み込みで作曲活動をしていたこともある。シューベルトは、劇音楽を依頼からわずかに数週間で仕上げなければならず、序曲を書き下ろすことができなかつたため、オペラ《アルフォンソとエストレッタ》のために書いたものの未だ日の目を見ていなかった別の序曲を転用し、どうにか初演にこぎつけた。

ところがややこしいことに、現在《ロザムンデ》序曲として一般に知られる音楽は、シューベルトの生前に《ロザムンデ》という題名で演奏されたことは一度もない。これは、まったく別の劇《魔法の豎琴》(1820 年 8 月にアン・デア・ウィーン劇場で初演)のためにシューベルトが書いた序曲なのである。シューベルトの死後、1800 年

代半ばに出版者が誤って《ロザムンデ》序曲というタイトルをつけて出版したため、誤解が広まってしまった。本公演でお聴きいただくのは、こうした理由から、慣習的に《ロザムンデ》序曲と呼ばれている作品である。重々しく不安げなハ短調の序奏につづき、軽快で明朗なハ長調の主部が奏される。

ところで、ウィーン生まれのシューベルトが幼い頃からベートーヴェンに憧れを抱いていたことはよく知られている。ベートーヴェンの死の翌年、31歳の若さでこの世を去ったシューベルトの遺体は、彼の生前の希望により、ベートーヴェンが埋葬されていたウィーンのヴェーリング墓地に葬られた（二人の墓地は後にウィーン中央墓地に移されている）。

L. v. ベートーヴェン (1770~1827) : ピアノ協奏曲第 5 番変ホ長調 Op. 73 《皇帝》

第 1 楽章 アレグロ

第 2 楽章 アダージョ・ウン・ポーコ・モッソ

第 3 楽章 ロンド・アレグロ

《皇帝》という呼び名はベートーヴェン自身に由来するものではないが、この通称と作品の凛とした佇まいが相まって、第 5 番はベートーヴェンが完成させた 5 つのピアノ協奏曲のうちもっとも人気のある作品である。1808 年から 1809 年にかけてウィーンで作曲され、長きにわたってベートーヴェンの支援者であり弟子でもあったルドルフ大公に捧げられた。ナポレオン戦争真っ只中の当時、フランス占領下の

ウィーン的生活環境は悪くなる一方で、大公はハンガリーに亡命していた。大公の留守中にピアノ協奏曲を書き進めていたベートーヴェンは、ドイツ・オーストリアへの愛国心を強めていき、第2楽章の自筆スコアの端には「オーストリアはナポレオンに報復せよ」と走り書きまでしている。完成した協奏曲は、1811年1月にウィーンのロプコヴィツ宮殿にて、亡命から戻った大公がソリストを務めて非公開で初演された。

次に演奏されるシュトラウスの《英雄の生涯》は、ベートーヴェンの交響曲第3番《英雄》へのオマージュも込めて同じ変ホ長調で書かれているが、この《皇帝》も変ホ長調である。長大な第1楽章は、オーケストラの主和音とピアノのカデンツによって絢爛豪華に幕開けし、古典的な協奏曲のソナタ形式を踏襲しながらも自由な発想を取り入れて発展する。つづく緩徐楽章の第2楽章は、変奏曲の特徴をもつ三部形式で、室内乐的な魅力と天上的な美しさをたたえる。第2楽章から切れ目なく演奏される第3楽章は、ロンド・ソナタ形式をとり、ホルンやトロンボーンをはじめとする楽器により随所で奏される「ターンタタッ、タッタッタッ」というファンファーレのリズムを印象に残しながら、華やかにフィナーレを飾る。

R. シュトラウス (1864~1949) : 交響詩 《英雄の生涯》 Op. 40

1898年の夏、ミュンヘンの宮廷歌劇場の指揮者をまもなく務め終えるシュトラウスは、《英雄の生涯》のスケッチをはじめていた。その頃友人に宛てた手紙には、冗談をこめてこのように書いている。「ベートーヴェンの《英雄》は、私たちのような指揮者にはあまり好かれず、そのせいでほとんど演奏されません。そこで私は、目下の急務に対処すべく、もっと偉大な《英雄の生涯》という交響詩を作曲しています。葬送行進曲はありませんが、変ホ長調で、かつて英雄的精神と結び付けられたホルンをたくさん使っています。」34歳のシュトラウスは、自らの充実した半生を早くも振り返り、さらに希望に満ちた将来を展望したのであろう。しかしながら一方で、詩人エーベルハルト・ケーニヒがこの作品の内容について「作曲者の指示と説明に従って」書いた詩には、その自伝的性格を直接は見てとれない。このことなどから、シュトラウスは普遍的な英雄像を描こうとしたに過ぎない、とも言われる。1898年の終わり、彼は新拠点ベルリンでスコアを書き上げ、翌年3月にフランクフルトで初演の指揮をとった。

作品は6つの部分からなる。この区分は総譜に記されていないが、上述の詩や、シュトラウスが友人たちに語ったことを手掛かりに、今日まで伝えられているものである。冒頭の〈英雄〉は、意気揚々とした英雄の主題ではじまる。手紙に書かれていたように、ホルンが弦楽器とともにその旋律を受けもつ。歯切れよい刻みからは、英雄の軽やかな足取りが聞こえてくる。全休止の後、フルート、続いてオーボエ、イ

ングリッシュ・ホルンといった木管楽器がやかましくお喋りをするように重なり合うところからが〈英雄の敵〉である。これらは英雄を非難し馬鹿にする敵たちを表している。すっかり落ち込んだ英雄の主題ははじめ短調で現れるが、次第に活力を取り戻す。すると突然、独奏ヴァイオリンの優美な旋律が奏でられる（〈英雄の伴侶〉）。この愛情は、はじめは英雄に受け入れられないが、次第に英雄の主題が加わり、二人の愛は成就する。続いてトランペットのファンファーレを合図に〈戦場での英雄〉に入る。伴侶の応援や敵たちの嘲笑に揉まれながら、英雄は勝利へと導かれる。ハーブの強烈なアルペジオが静かになっていった後、シュトラウスのこれまでの数々の作品のモチーフが断片となって聞こえてくる（〈英雄の業績〉）。荒々しいフレーズを経て再び穏やかになると、牧童の笛の音が奏でられる。〈英雄の引退と完成〉である。英雄は田園風景の広がる平穏な土地で、過ぎし日を偲びながら伴侶とともに余生を送る。

中村 伸子（元団員・音楽学）